忍城，岩付城は誰が築城したのか

長享の乱（長享元年（1487）～永正２年（1505））

黒田基樹氏
「長享の乱」左衛門尉（下総守の子か、法名正等）は山内上杉に味方したか。
延徳２年（1490）９月、扇谷上杉に味方する古河公方足利政氏は忍城を攻撃。扇谷上杉氏はそれを支援山内上杉氏は成田氏を支援し、荒川を挟んで対陣したか。

・**上杉顕定書状**（黒田基樹氏史料紹介より）

17　中条弾正左衛門尉宛書状（中条文書）
（懸紙上書）
『長享二　十二月五日』

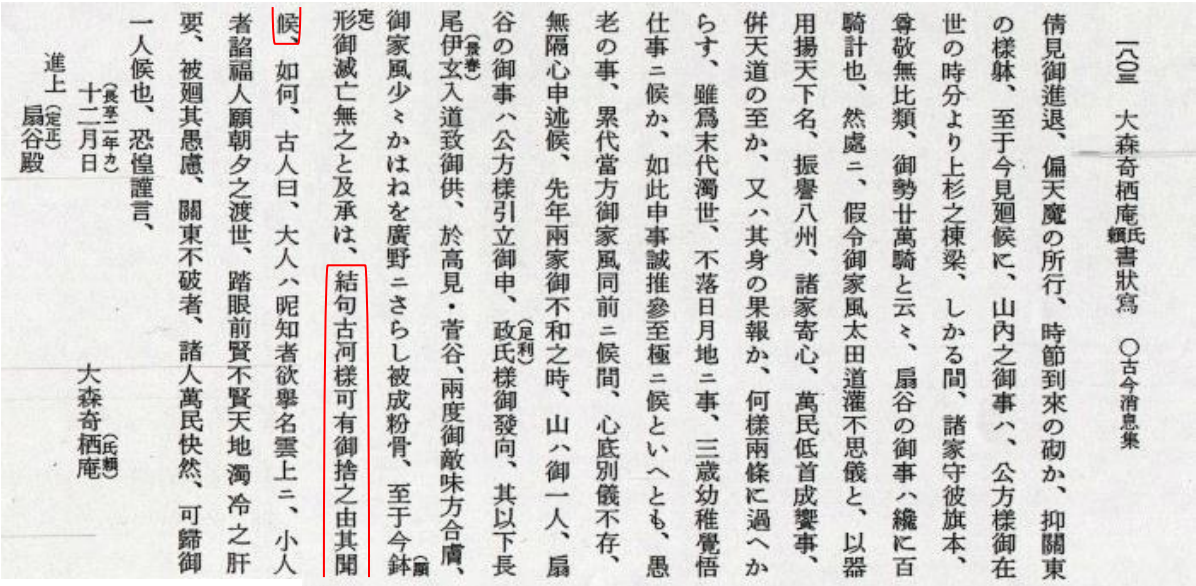
中条弾正左衛門尉殿　　顕定　」
（足利政氏）
御方御所様于今横田御張陣候，去十五日合戦之時，手負死人数多候上，御勢衆相帰候，此砌成行候者，本意不可有疑候，以十日之用意，不移時日着陣候者，可為大慶候，委細尻高左京亮（景宿）可伝語候，恐々謹言，
（長享二年）
十一月廿三日　顕定（花押２）
（定資）
中条弾正左衛門尉殿

御方御所（足利政氏）様、今に横田御張り陣候、去 15 日合戦の時、手負い死人数多く候上、御勢衆相帰り候、このみぎり成り行き候は、本意疑い有るべからず候、10 日を以ってこれを用意、時日を移さず着陣候は、大慶為すべし候、委細、尻高左京亮が語伝えるべく候、恐々謹言
顕定　中条弾正左衛門尉（定資）殿

この書状は黒田氏の文書紹介の中に載せているものですが、各書状についての説明は書かれていませんので読み下してみました。この時に越後の中条（なかじょう）定資は顕定を支援のため上野の白井に在陣していたようです。

この内容を埼玉苗字辞典では「上杉顕定は、中条定房の比企郡高見原合戦における戦功を尻高左京亮の語り伝えにより賞す」としていますが、この書状の中に中条氏を賞する言葉は見えません。「手負い死人数多く候上、御勢衆相帰り候、**このみぎり成り行き候は、本意疑い有るべからず候**」が気になります。この戦いで足利政氏は上杉定正を支援し、定正軍が顕定軍に勝った（優勢だった）ようですが、定正軍にも多くの死傷者がでたようで、戦の後に政氏を横田陣に残したまま河越城に帰ってしまい、政氏から顕定に「自分勝手に帰ってしまった定正への支援は止める」との連絡が入ったようにも考えられます。この戦以降、政氏は上杉定正から上杉顕定の支援に替えたようにも考えられます。

長享 ２年(1488)12 月　・**大森奇栖書状**（大森教訓状：古今消息集）



〔八〇〕　大森奇栖庵氏顕書狀寫　○古今消息集

倩見御進退、偏天魔の所行、時節到來の砌か、抑關東の樣躰、至于今見廻候に、山內之御事ハ、公方樣御在世の時分より上杉之棟梁、しかる間、諸家守彼旗本、尊敬無比類、御勢廿萬騎と云々、扇谷の御事ハ纔に百騎計也、然處ニ、假令御家風太田道灌不思儀と、以器用揚天下名、振譽八州、諸家寄心、萬民低首成饗事、併天道の至か、又ハ其身の果報か、何樣兩條に過へからす、雖爲末代濁世、不落日月地ニ事、三歲幼稚覺悟仕事ニ候か、如此申事誠推參至極ニ候といへとも、愚老の事、累代當方御家風同前ニ候間、心底別儀不存、無隔心申述候、先年兩家御不和之時、山ハ御一人、扇谷の御事ハ公方樣引立御申、政氏（足利）樣御發向、其以下長尾伊玄（長尋）入道致御供、於高見・菅谷、兩度御敵味方合膚、御家風少々かはねを廣野ニさらし被成粉骨、至于今鉢（扇）形御滅亡無之と及承は、結句古河樣（定）可有御捨之由其聞候、如何、古人曰、大人ハ昵知者欲學名雲上ニ、小人者諂福人顧朝夕之渡世、踏眼前賢不賢天地濁冷之肝要、被廻其愚慮、關東不破者、諸人萬民快然、可歸御一人候也、恐惶謹言、

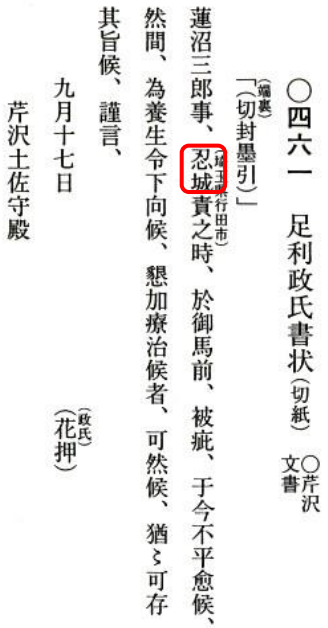
（長享二年カ）十二月日　　大森奇栖庵（氏顕）

進上　扇谷（定正）殿

御進退を倩（つらつら）見るに、偏に天魔（狂気の沙汰）の所業、時節到来の砌か、抑える関東の様躰、今に至り見廻し候に、山内之御事は、公方様御在世の時分より上杉の棟梁、しかる間、諸家彼の旗本を守る、尊敬比類無く、御勢 20 万騎と云々、扇谷の御事は纔（わずか）に 100 騎計りなり。
　然る處に、暇令（たとえ）御家風太田道灌不思議（どうしてなのか考えも想像もできないこと）と、器用を以て天下に名を上げ、八州に誉（ほまれ）を振るい、諸家が心を寄せ、万民首を低く響き成る事、併せて天道の至りか、又は其の身の果報か、何様両條に過べからず、末代濁世を為すと雖も、日月地に落ちずの事、三歳の幼稚覚悟の仕事に候か。
　此の申す事の如く誠に推参至極に候といへども、愚老の事、累代当方御家風同前に候間、心底別儀存ぜず、隔てなく心申し述べ候。
　先年両家御不和の時、山（山内）は御一人、扇谷の御事は公方様引き立て御申し、政氏（足利）様御発向、其れ以下長尾伊玄入道（景春）御供致し、高見・菅谷に於いて、両度御敵味方膚を合せ、御家風少々かばねを廣野にさらし粉骨為られた、今に至るも鉢形御滅亡無きことと承け及びは、結句古河様御捨の由有るべし其れ聞き候、如何（いかが）、古人曰く、大人は知者に昵（なじみ）名を雲上に挙げるを欲す、小人は福人（福者）に諂い朝夕の渡世を願う、踏眼前賢不天地濁冷之肝要、廻される其の愚慮、関東不破は、諸人万民快然、御一人帰すべし候、恐々謹言　十二月　日（長享二年カ）
大森奇栖庵（氏頼）
進上　扇谷殿（定正）

　扇谷上杉定正の家臣の大杉氏頼が定正に送った書状で、「大森教訓状」とも云われており、ほぼ同じ内容の書状を江戸城の曽我豊後守にも送っています。この書状は定正を戒める内容で、道灌を殺したことを責めており、**支援してもらっていた政氏とも手を切った**ことも責めてもいるようです。
　政氏が顕定を支援するようになったのは、定正の明応３年（１４９４）の、荒川の合戦（定正と顕定が比企郡小川町から大里郡寄居町にかけての地域で対戦）で、定正が対陣中、落馬の傷が元で死亡してからとしている情報が多いようですが、大森氏頼の書状の長享２年 12 月（1488）頃に、政氏は定正の支援を止めていたと思われます。
　また、「旅宿問答」にも“先年長享年中に、上杉棟梁山内顕定、同名修理大夫定正と発波乱、然るに将軍佐馬頭（足利）政氏、顕定為合力引率一万余騎、村岡　如意輪寺に有り発向す”とあり、長享年中に政氏は顕定に与していたと思われます。

・**足利政氏書状**（芹沢文書）


○四六一　足利政氏書状（切紙）　○芹沢文書
（編裏）「（切封墨引）」
蓮沼三郎事、忍（埼玉県行田市）城責之時、於御馬前、被疵、于今不平愈候、
然間、為養生令下向候、懇加療治候者、可然候、猶〻可存
其旨候、謹言、
九月十七日　（政氏）（花押）
芹沢土佐守殿

蓮沼三郎事、忍城責之時、於御馬前、被疵、今に平愈せず候、然る間、養生の為下向候、懇加療治候は、猶々その旨存ずべく候、謹言
　九月十七日　　（政氏花押）　　芹沢土佐守殿

　この文書は年号と忍城に居た人物の名は書かれていませんが、黒田氏は延徳２年と見ています。大森奇栖書状と旅宿問答からすると、長享年間には政氏は定正への支援を止めているようで、既に山内上杉側を支援していたと考えられます。
　この時に政氏方（顕定方）の成田氏（別符氏）も忍城を攻めたように考えます。忍城にはこの時まで、扇谷上杉に味方する「忍氏」がいて、政氏の味方する山内上杉の成田氏も一緒に攻めて、旧忍城を落城させたと考えます。
「成田記」と「江袋氏系図」などから見ると、成田氏が忍城に移ったのは、延徳年間以降のようで次の記述があります。

・延徳元年（1489）山の内上杉顕定に話し、その用意をして一時にかゝり、忍大亟は武備もなく人教もないので、館に火をかけ、妻子共々自害、更に扇ケ谷の与党、児玉武蔵大株重行も攻め殺す（成田記）
・延徳年中、成田下総守親恭？（親泰か）忍城移受其律令（江袋氏系図）
・永正年中新築忍城（大私部直姓成田家系図）

成田記には、「古河公方政氏は怒って、忍城を攻めて来た。永正 14 年（1517）の事である」とありますが、永正９年（1512）に上杉可諄（顕定）の後継をめぐって顕実と憲房の二人の養子が内訌し、鉢形落城で憲房側が勝利した時に顕実（政氏の子）に味方していたのは政氏と成田氏です。そしてその後の永正 13 年（1515）に勢力の衰えた政氏は扇谷の上杉朝良（建芳）の勧めによって小山城より岩付城に移っています。永正 14 年の忍城攻めはなかったと考えます。

黒田氏は足利成氏の「忍城用心」の書状で、この足利政氏書状の時には忍城に成田氏が居て、扇谷上杉（定正）に足利政氏が味方して山内上杉（顕定）側の忍城を攻めたとして、「荒川を挟んで対陣したか」としています。
下の二つの史料は、黒田氏がその根拠としている史料で、一橋大学の竹井英文氏も「戦国前期東国の城郭に関する一考察: 深大寺城を中心に（2009-04）」の中に掲載しているもので、「史料５」は扇谷上杉側の書状で、「史料６」は山内上杉側の書状です。

【史料 5】　「**上杉定正**状写」『北区史』資料編吉代中世一，241 号，竹内文平氏所蔵文書
就**箕田**江着陣示預候，**篠崎**江被進御陣，如斯預　**御書**候間，此渡ニ懸橋為御迎，**村岡**口へ可令出陣候，其方御用心被仰付，此口へ御家風一騎も被立候者，可然候，案文写進之候，可被御披見候，恐々謹言，
八月廿七日　　修理大夫**定正**
謹上　治部大輔殿

【史料 6】　「**上杉顕定**書状写」（『北区史』資料編古代中世一，248 号，古簡雑嚢六）。
昨日書状，只今申刻於**平原**陣披見，去十六以来，連日被相動候哉，尤肝要候，仍定正陣所**箕田**へ差懸候処，**堀(屈)須**江被馳参候，荒川端不自由上切所候間，諸軍揺難有之候間，自**成田**江打廻，為可懸一戦**平原**江移陣候間，明日可為仰候，此砌其口揺専一候，**千葉介自胤**着陣候間，兵議等弥可心安候，早々出陣待入候，恐々謹言，
十月廿日　　顕定
太田源六殿

黒田氏は顕定の書状の中の「平原（該当する地名は見つかりません）」を「笠原」に比定しており、それで荒川を挟んで対陣した、といっていますが、顕定は太田源六に「屈須へ馳せ参じられ候、荒川端は不自由の由難所候ので、諸軍揺（あゆ）がし難くこれ有り候ので、成田江より打ち廻り、懸かる一戦平原へ陣を移り候ので、明日仰せ為るべく候、此のみぎり其の口揺がしが一番に候」といっており、笠原では一戦はできないと思われ、定正が向かっている鉢形の手前にある「苅原」の方が「平原」の比定地には合っているように思います。
竹井氏は、『いずれも，『北区史』に既に収録済みの史料で，長享の乱時のものと推定されている。この二つを比べてみると，定正と顕定が対立していること，定正が箕田（鴻巣市）から村岡口（熊谷市）へ進み，鉢形城方面へと向かおうとしていたと思われること，定正が箕田に在陣していることが共通していること，日付も近いことから，長享の乱時のもので，しかも同年のものと考えるのが自然だろう。（一部略）また【史料６】によると，宛所である太田資康は，箕田の至近距離にある屈須（鴻巣市）に在陣していることがわかる。（一部略）よって【史料５・６】ともに延徳元年から二年の可能性が高い』として、

「平原」の比定地は示していませんが、荒川を挟んでの対陣でなく、定正が鉢形城へ向かう途中と見ています。

相模国守護である上杉定正の書状は、宛名の治部大輔宛であり、新田岩松氏の歴代の官途名であり、岩松尚純のことのようです。古河公方（政氏）が箕田に着陣するために篠崎に進むので、定正に村岡口に進むようにとの書状を、岩松尚純に、そのことを知らせた書状のようです。延徳二年（1490）ではなく、長享２年（1488）の時の書状のようです。

山内上杉側の太田源六（資康）が屈須近辺に居たこと、これは梅花無尽の長享 2 年に、“11 月 21 日、…太田資康、従顕定幕中云、…”とあります。

長享２年１１月 15 日（1488）の高見原合戦が終わった以降の延徳年間には、古河公方足利政氏は、山内顕定に味方していたと考えます。

黒田氏はこの延徳年間の頃を「扇谷上杉に味方する古河公方足利政氏は忍城を攻撃。扇谷上杉氏はそれを支援、山内上杉氏は成田氏を支援し、荒川を挟んで対陣したか」としていますが、政氏はすでに大森奇栖書状や旅宿問答に見られるように扇谷上杉定正を見限り山内上杉を支援しており、成田氏は山内上杉氏に従っており、定正が攻めようとしていたところは忍城でなく、顕定が居城としていた鉢形城と考えるのが自然のように考えます。

【黒田基樹氏】
明応２年（1493）までの間に、山内上杉氏家宰長尾忠影の三男景泰（のち顕泰、左衛門尉・下総守、？～1524）を養子に迎える。また足利方の騎西郡南部を与えられ、拠点として岩付城を構築、在城する。
同３年７月、両上杉氏の抗争が再開。古河公方足利氏は山内上杉氏に味方する。11 月、扇谷方伊豆伊勢宗瑞は岩付城攻撃を図り、足利政氏の宿老梁田茂助は援軍を働く。岩付城の初見。

六一七　足利政氏書状（千葉県立関宿城博物館保管築田家文書）

（切封）
「（切封墨引）」

去十三日、政能（本間）方江折紙到来候間、翌日必可進旗之処、顕定（上杉）申旨候、因茲延引、然而十四日未刻伊勢新九郎（宗瑞）退散由其聞（連）達候、可属御心意之時節純熟候歟、目出候、宗瑞（伊勢）敗北、偏其方（緒玉郡）岩付江合力急速故候、戦功感悦候、仍凶徒（比企郡）高坂張陣之時不被差懸段、顕書中候間、先以理候、雖然顕定不庶幾調儀更難成候、爰元可令推察候、惣別悠之様候、於吉事上無曲子細出来事可有之候哉、被進勝陣候事も非関覚悟（ママ）計候、委旨五郎（箕田）可申遣候、謹言、

十一月十七日（明応三年）　（足利政氏）（花押）

築田河内守（成助）殿

黒田氏の岩付城の初見は左掲載の足利政氏書状を指していますが、この史料には「城」の文字はなく、「岩付江（へ）」となっています。

また、黒田氏は鎌倉大草紙にある、「上杉修理大夫持朝入道、武州河越の城を取立ける、太田備中入道（道真）は武州岩付の城を取立、同左衛門大夫（道灌）は武州江戸の城を取立ける」は信頼できないとしています。

そこで物語の中でなく、「岩付」の名が見える書状や文献などを探して、見つけたものを以下に提示します。

下の史料は熊谷市史（永徳二年四月廿日（1382）証判）から抜書きしたもので、康暦２年（1380）の小山義政攻めのことが書かれており、別符尾張太郎（幸直）も鎌倉公方の足利氏満から軍勢催促状を貰っており、同じように従ったと思われる長谷河親資の軍忠状で、その中に岩付御陣が見え、岩付は街道沿いの重要な拠点であったと思われます。黒田氏が初見とした史料より 100 年ほど前に城ではありませんが、「岩付御陣」とあります。

江田文書：「長谷河親資の軍忠状」
長谷河兵衛太郎親資軍忠事、為小山下野守義政御退治御進発間、去々年（康暦二年六且（1380））武州国符・村岡御陣、... 足利御陣、... 長井・吉見御陣、於**岩付御陣**追落敵候畢、... 太田庄御発向之間、... 向于小山鷲城、...」

この軍忠状の事は、角川日本地名大辞典（旧地名編）にも載っています。

武光荘（中世）
鎌倉期に見える荘園名秩父【ちちぶ】郡のうち永徳２年 4 月 20 日，この地に住む長谷川兵衛太郎親資に，小山下野守義政退治に忠節があったと承了花押の軍忠状が届いている（江田家文書）...

また、「岩付」が記載されているものに、国会図書館所蔵の「鎌倉持氏記（写本）」があります。この文献は鈴木真年から根岸武香に贈られ、後に胄山文庫として国会図書館に寄贈されたもので、日本ではこの一冊しか現存していないようです。奥書によると、浅羽民部少輔が宝徳 3 年（1451 年）8 月に鎌倉公方足利持氏の最後の日記として書き留めたもののようで、浅羽民部少輔は持氏の側近の浅羽下総守の一族と推定されているようです。成田と岩付が記述されている箇所を一部抜書きしました。

同七月一日一色伊予守引率シテ数多ノ軍共ヲ越テ利根川ヲ乱入武蔵国須賀土佐入道在所ニ令放火須賀ノ家人数輩討死仕ノ由早馬有ノ間　同二日廰鼻性順、長尾景仲馳向テ於テ其ノ日**成田ノ館**ニ伊予守ト終日度々合戦ス　同四日合戦馳加ル御方ニ人々ハ者、入西ニハ毛呂三河守、豊島ニハ清方被官人々計ニテ至掾ノ無勢也、北一揆ハ大畧伊予守ニ同心スルノ間、...

被合戦以後ニテ性順モ長尾青島ニ在陣、持朝ハ**岩付陣**ニテ粗聞之難掲クト駒鞭ヲかかクト山河ヲのぼル間合戦以後馳着記ス、　この吉見方十五才未無ノ前後ノ弁處ニ伊予守ト同心シ一方ノ大将ニ人々取立申ノ間、打出給刻ニ持朝被官上田新蔵人馳向無是非奉討云々、勝スタル豊後守野心令露顕哉、持朝足利町在陣ノ時七月廿五日誅儀ス、之ヲ同各八人被討記ス

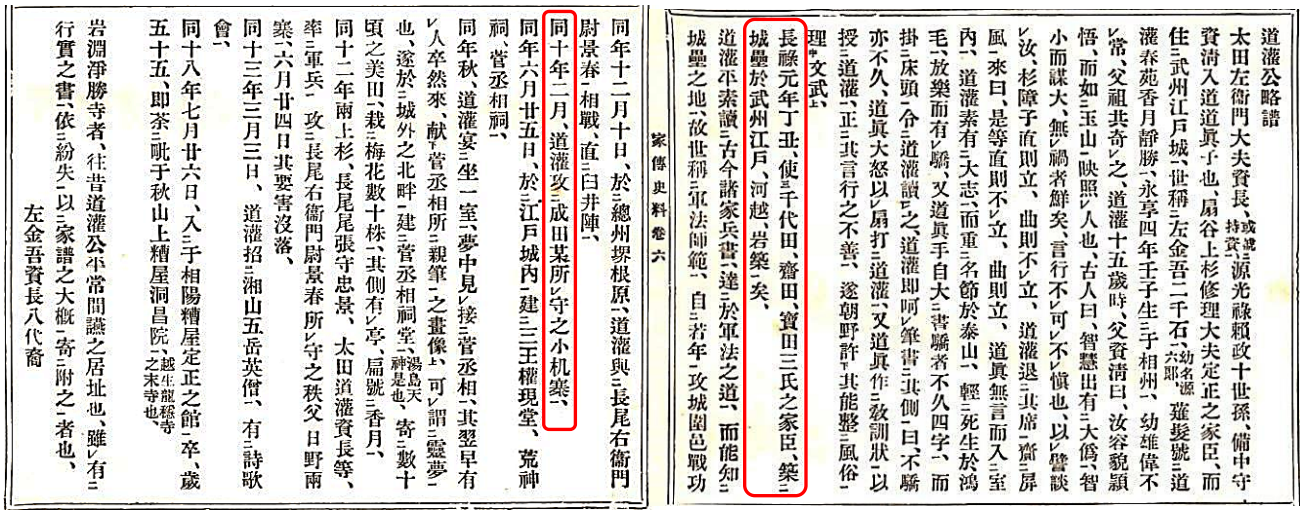
為上州固メ三藹重方在陣國分ニ上杉理亮為相州警固ノ高麗寺ノ下徳宣フ取陣ヲ、今河上総ノ介同国平塚取陣ヲ、蒲原播磨入道国符津道場張ル陣ヲ、彼両人者、箱根別當与大森伊豆守可ノ令乱入旨聞ル間為メト其ノ固メシ云々　京勢武衛戸部始ハ為向古河城ニ**岩付張陣**、結城責時結城馳着令戦、以後天命引帰記、この結城氏朝舎弟山河兵部大輔離舎兄ニテ令降参可為結城遺跡申云々

この文献を読んでみると、「持朝ハ岩付陣」の記述は鎌倉大草紙にも似た記載がありますが、「京勢武衛戸部始ハ為向古河城二岩付張陣」は鎌倉大草子には書かれていません。この元の文献から鎌倉大草子が書かれたようにも思われます。

結城合戦があったのは、永享 12 年（1440）で、岩付陣に居た持朝は扇谷上杉の上杉持朝ですので、この頃には扇谷上杉氏が在地していたと考えられます。
黒田氏は、「明応 2 年（1493）までの間に、山内上杉氏家宰長尾忠影の三男景泰（のち顕泰、左衛門尉・下総守、？～1524）を養子に迎える。また足利方の騎西郡南部を与え

られ、拠点として岩付城を構築、在城する。」としていますが、騎西郡南部は鎌倉持氏記や鎌倉大草子にあるように、扇谷上杉方のものであったと思われます。この間、山内上杉に従う成田氏（松陰私語）と小机城の成田氏（太田道灌状，史籍雑纂３道灌公系譜（下図））の活躍は見られますが、独立した成田氏の活躍は見ることができません。黒田氏は道灌公系譜に見える成田氏を騎西郡の成田氏と同系と見ているために、最初は長尾景春に従ったとも見ていますが、相模国にも成田荘北成田郷があり、そこにも成田氏は存在していました。

黒田氏は「戦国期成田氏の系譜と動向」の中で、「道灌公略譜（史籍雑纂第三家傳史料６）」下の左側史料の「道灌攻成田某所守之小机塞（とりで）」の成田氏も騎西の成田氏と関連があるとしています。この史料には下の右側に岩付城の築城に関することも書かれていますが、それは無視しているようです。「**長禄元年丁丑、使=千代田、齋田、實田三氏之家臣、築=城壘於武州江戸、河越、岩築-矣、**」とあり、千代田、齋田、實田三氏の家臣を使って武州江戸，河越，岩築（岩付）城を築かせたようです。鎌倉大草紙にあるように太田道真の築城ではなく、道灌が長禄元年（1457）に家臣に命じて作らせたようです。黒木氏はなぜかこの箇所を取り上げずに、自分で作り上げた成田正等が岩付城を造ったことにしています。道灌が直接造った城ではないと思いますが、道灌が造らせた城と思います。



道灌公略譜

太田左衛門大夫資長、或號=持資、源光祿賴政十世孫、備中守資清入道道眞子也、扇谷上杉修理大夫定正之家臣、而住=武州江戸城、世稱=左金吾二千石、幼名源六郎、薙髮號=道灌春苑香月靜勝、永享四年壬子生=于相州、幼雄偉不レ常、父祖共奇レ之、道灌十五歲時、父資清曰、汝容貌頴悟、而如=玉山一映照レ人也、古人曰、智慧出有=大僞、智小而謀大、無レ禍者鮮矣、言行不レ可レ不レ愼也、以レ譬談レ汝、杉障子直則立、曲則不レ立、道灌退=其席一齋=扉風一、來曰、是等直則不レ立、曲則立、道眞無言而入=室內一、道灌素有=大志一、而重=名節於泰山一、輕=死生於鴻毛一、放樂而有レ驕、又道眞手自大=書驕者不久四字一、而掛=床頭一、令=道灌讀=之、道灌即呵レ筆書=其側一曰、不驕亦不久、道眞大怒以レ扇打=道灌一、又道眞作=教訓狀一、以授=道灌一、正=其言行之不善一、遂朝野許=其能整=風俗一理=文武一、

長祿元年丁丑、使=千代田、齋田、實田三氏之家臣、築=城壘於武州江戸、河越、岩築-矣、

道灌平素讀=古今諸家兵書一、達=於軍法之道一、而能知=城壘之地一、故世稱=軍法師範一、自=若年一攻城圍邑戰功

家傳史料卷六

同年十二月十日、於=總州堺根原一、道灌與=長尾右衛門尉景春一相戰、直=臼井陣一、

同十年二月、道灌攻=成田某所レ守之小机塞一、

同年六月廿五日、於=江戸城內一建=三王權現堂、荒神祠、菅丞相祠一、

同年秋、道灌宴=坐一室一、夢中見レ接=菅丞相一、其翌早有レ人卒然來一、献=菅丞相所=親筆一之畫像一、可レ謂=靈夢一也、遂於=城外之北畔一建=菅丞相祠堂一、湯島天神是也、寄=數十頃之美田一、栽=梅花數十株一、其側有レ亭、扁號=香月一、

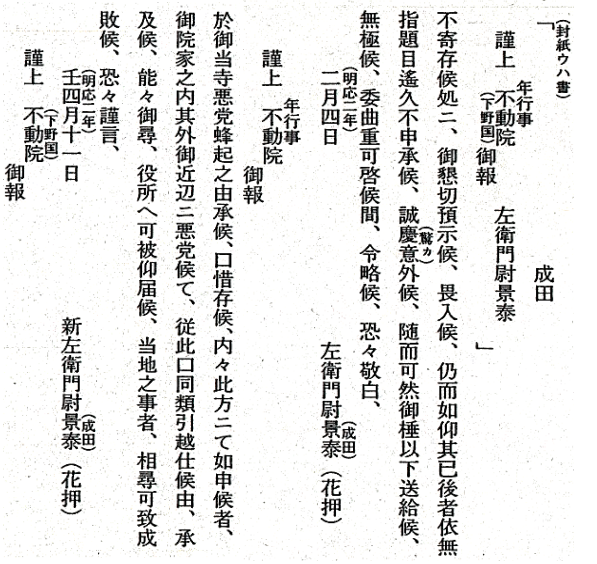
同十二年兩上杉、長尾尾張守忠景、太田道灌資長等、率=軍兵一、攻=長尾右衛門尉景春所レ守之秩父日野兩塞一、六月廿四日其要害沒落、

同十三年三月三日、道灌招=湘山五岳英僧一、有=詩歌會一、

同十八年七月廿六日、入=于相陽糟屋定正之館一、卒、歲五十五、即荼=毗于秋山上糟屋洞昌院一、越生龍穩寺之末寺也、

岩淵淨勝寺者、往昔道灌公平常問讌之居址也、雖レ有=行實之書一、依=紛失一、以=家譜之大概一、寄=附之一者也、

左金吾資長八代裔



（封紙ウハ書）

「　成田

謹上　年行事不動院（下野国）御報　左衛門尉景泰　」

不寄存候処ニ、御懇切預示候、畏入候、仍而如仰其已後者依無指題目遙久不申承候、誠慶意（寄カ）外候、随而可然御棰以下送給候、無極候、委曲重可啓候間、令略候、恐々敬白、

（明応二年）二月四日　左衛門尉景泰（成田）（花押）

謹上　年行事不動院　御報

於御当寺悪党蜂起之由承候、口惜存候、内々此方ニて如申候者、御院家之内其外御近辺ニ悪党候て、従此口同類引越仕候由、承及候、能々御尋、役所へ可被仰届候、当地之事者、相尋可致成敗候、恐々謹言、

（明応二年）壬四月十一日　新左衛門尉景泰（成田）（花押）

謹上　不動院（下野国）御報

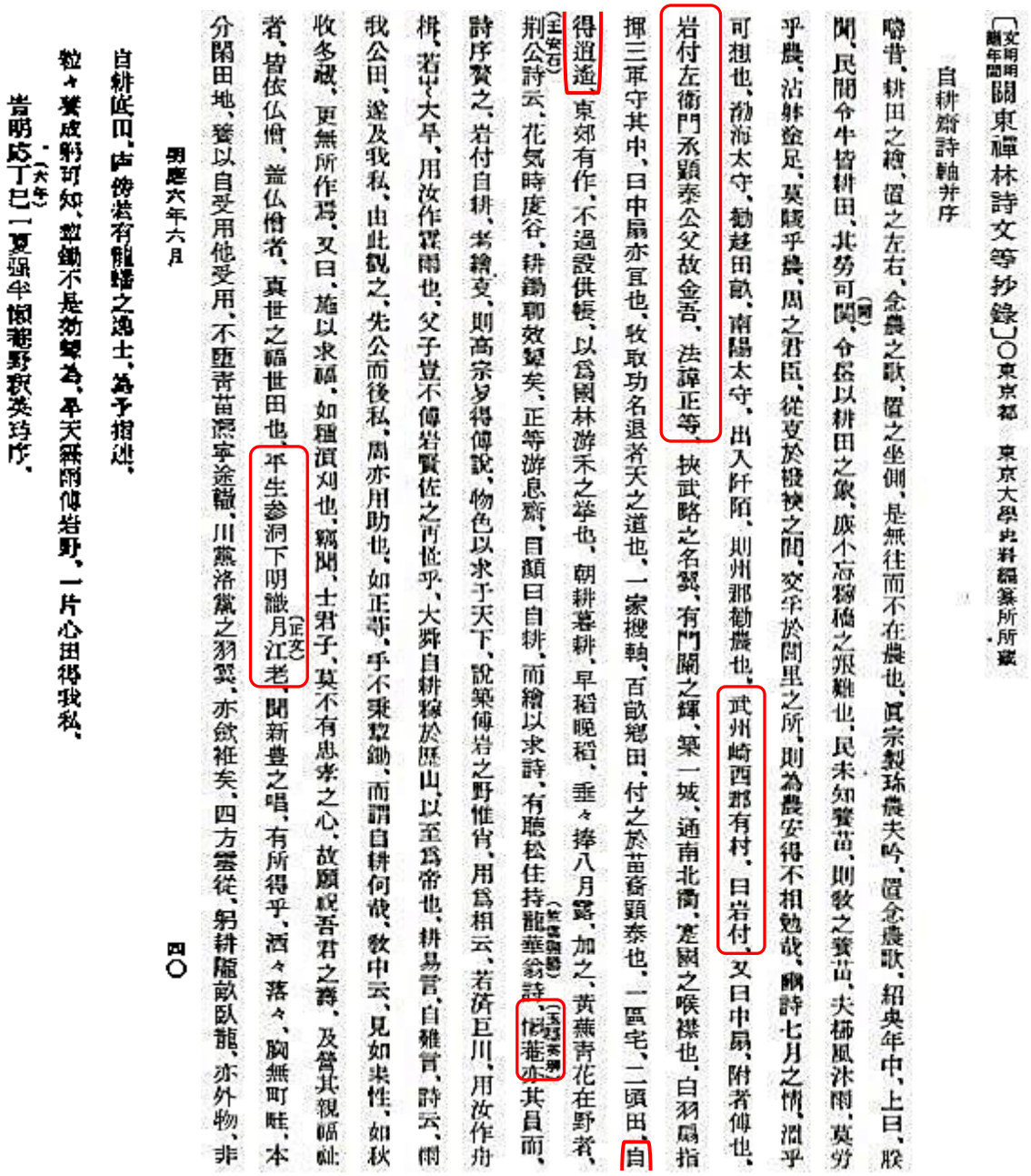
左載の史料は黒木氏が埼玉県の中世部門調査委員に携わった「埼玉史料叢書中世 11」の中のものです。年号の無い書状ですが、この年号を明応２年（1493）としており、少し前の延徳元年（1490）か２年頃に足利政氏の忍城攻めがあったと考えているようで、それと同じ年の明応２年には扇谷上杉定正と北条早雲が三浦や新井要害を攻落しており、そして同 10 月には武州へ討入っています。その後、明応 3 年（1494）の 10 月には荒川の合戦で、定正と顕定が比企郡小川町から大里郡寄居町にかけての地域で対戦中に定正は落馬の傷が元で死亡します。

これらの書状は今の足利の鑁阿寺に残っているものですが、読んでみると下野国の鑁阿寺に関係のあった明応２年ころの出来事のように思われます。この後に成田家の養子になったとして、忍城を造れたのか、そして岩付城も造れたかが疑問です。この書状の「成田」は黒田氏が注記したものと思います。ただし、長林寺長尾系図には「成田下総守」が見えることから成田氏の養子になって、初代顕泰は文明 16 年に亡くなっていますので、二人目の顕泰となったことは考えられます。

黒田氏は文明 16 年に亡くなった顕泰の名を誤認として、浄蓮寺過去帳（太田区史）の「宋廉成田六」「成宗同（成田）五」を取り上げ、親奏の法名「宋蓮」に顕泰を比定していますが、この浄蓮寺過去帳は秩父郡御堂村（東秩父村）のものと思われますが、この浄蓮寺は日蓮宗ですので、曹洞宗の武州の龍淵寺や越中の光厳寺の顕泰とは別人であると考えます。

永正６年（1509）、柴屋軒宗長が「東路のつと」で武州成田下総守顕泰亭を訪ねた時の顕泰は、長尾家から養子に来た顕泰のように思われます。

最後に、黒田基樹氏が成田正等を生み出した明応 6 年(1497)の関東禅林詩文等妙録自耕斎詩軸幷序です。



〔文明頃年間〕関東禅林詩文等抄録〕〇東京都　東京大學史料編纂所所藏

自耕齋詩軸并序

噫昔、耕田之繪、置之左右、念農之歌、置之坐側、是無往而不在農也、眞宗製珠農夫吟、置念農歌、紹興年中、上曰、朕聞、民間令牛皆耕田、其勞可閔、令岳以耕田之象、旅不忘糟糠之艱難也、民未知饗苗、則敎之饗苗、夫栁風沐雨、莫勞乎農、沾躬塗足、莫賤乎農、周之君臣、從事於機杼之間、交乎於閭里之所、則為農安得不相勉哉、豳詩七月之情、溫乎可想也、渤海太守、勸趙田畝、南陽太守、出入阡陌、則州郡勸農也、武州崎西郡有村、曰岩付、又曰中扇、附者傳也、岩付左衛門丞顕泰公父故金吾、法諱正等、挾武略之名器、有門闌之輝、築一城、通南北衢、扼關之喉襟也、白羽扇指揮三軍守其中、曰中扇亦宜也、牧取功名退者天之道也、一家攫軸、百畝鄉田、付之於苗裔顕泰也、一區宅、二頃田、自得逍遙、東郊有作、不過設供帳、以爲園林游禾之挙也、朝耕暮耕、早稻晩稻、垂々捧八月露、加之、黄蕪青花在野者、（王安石）荆公詩云、花気時度谷、耕鋤聊效顰矣、正等游息齋、目顔曰自耕、而繪以求詩、有聽松住持龍華翁詩、（笑雲瑞訔）（玉村竹齋）悠菴亦其員而、詩序贊之、岩付自耕、考繪、支、則高宗夕得傳說、物色以求于天下、說築傳岩之野惟肖、用爲相云、若濟巨川、用汝作舟楫、若中大旱、用汝作霖雨也、父子豈不傳岩賢佐之再世乎、大舜自耕稼於歷山、以至爲帝也、耕易言、自雜言、詩云、雨我公田、遂及我私、由此觀之、先公而後私、周亦用助也、如正事、乎不乘犂鋤、而謂自耕何哉、敎中云、見如耒性、如秋收多穫、更無所作焉、又曰、施以求福、如種須刈也、竊聞、士君子、莫不有忠孝之心、故願祝吾君之壽、及營其親福祉者、皆依仏僧、蓋仏僧者、真世之福世田也、平生參洞下明識月江老、（正芝）聞新豊之唱、有所得乎、洒々落々、胸無町畦、本分閑田地、養以自受用他受用、不堕寄苗深宰途轍、川薫洛黨之羽翼、亦欲衹矣、四方雲從、躬耕隴畝臥龍、亦外物、非

明應六年六月

自耕底田、由傍若有龍蟠之逸士、為予指述、

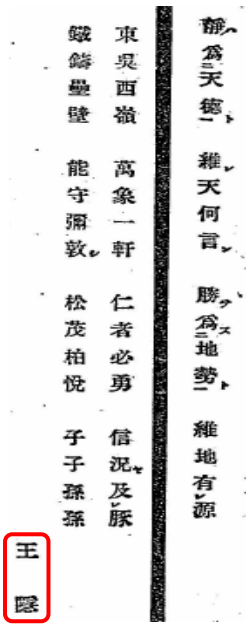
粒々饗成躬可知、犂鋤不是効顰為、平天無用傳岩野、一片心田得我私、

岩明応丁巳（六年）一夏强半懶菴野叟英玲序、

四〇

この詩軸には成田正等は出てきておらず、「**岩付左衛門丞顕泰**公父故金吾、法諱**正等**、武略の名翼を挟み門闌（たけなわ）の輝きあり」の「顕泰」の名だけで黒田氏は成田氏としていますが、顕泰の名以外は成田氏を表すと思われる文言は出てきません。かえって、「**自得**逍遥（自得は悠々自適して楽しむこと）」の太田道真が越生に住んだ「自得軒」を思わせる言葉や、万里集九が江戸城の太田道灌の「静勝軒」に掲げた詩軸「静勝軒銘詩幷序」の中に詩文を書いた建長寺の「**懶庵**（**玉隠英璵**）」の名が見え、また「平成洞下の明識**月江老**に参じて、新豊洞（良价大師の住した洞山：曹洞宗）の唱を聞く」など太田道真，道灌父子が中興した越生の龍穏寺２世となった**月江正文**の名が見えます。このように詩軸の中には太田家と関係のあった僧侶の名は見えますが、成田家と関係のある僧侶の名は見えません。

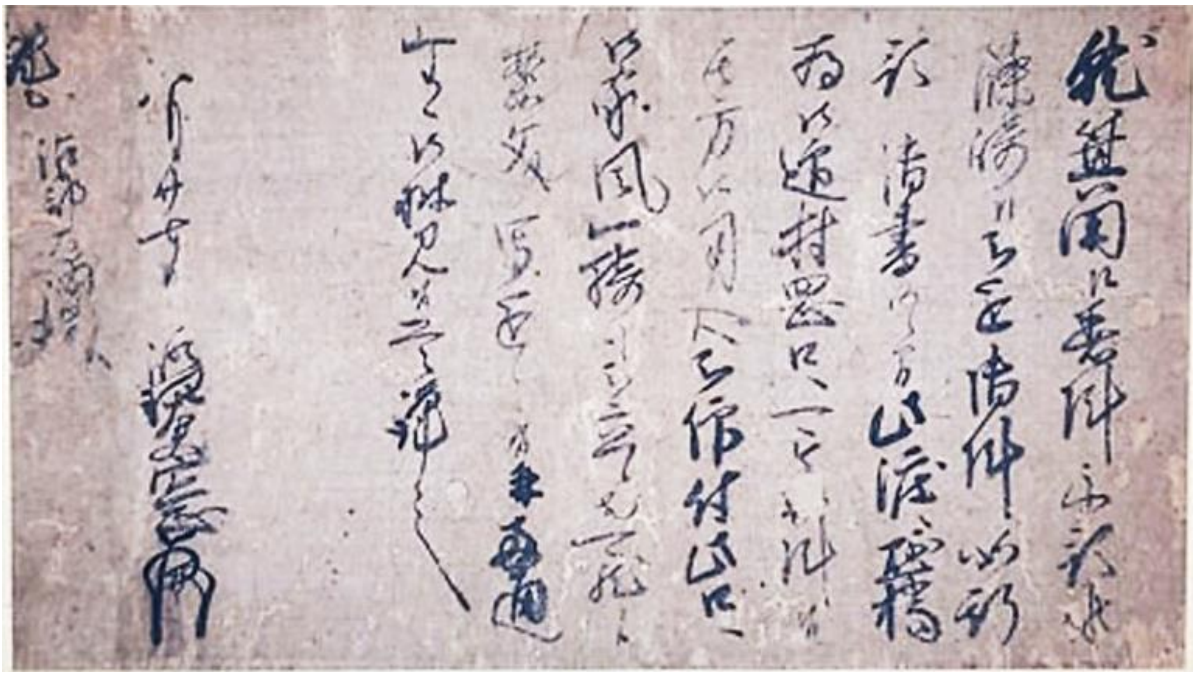
この詩軸の「正等」は太田道真を示していると考えます。



←「江戸城の静勝軒銘詩幷序」の中の「玉隠（英璵）」の詩

←「鎌倉大日記」

黒田基樹氏の熊谷市立図書館の講演資料の長徳の乱に、「同年 12 月、両上杉は和睦。足利政氏は忍城から本拠古河城に帰還。」とありますが、これは黒木氏著の「戦国期成田氏の系譜と動向」で、「鎌倉大日記」から持ってきたことが分かります。

でも、その原文の人物名は「政氏」でなく「成氏」であり、「鎌倉大日記」は成氏の代までしか書かれておらず、黒木氏はここでは人物の名前を変えています。

舒文堂河島書店ホームページより引用
上杉定正書状